HACK_07

プリンス・オブ・サステイナビリティを超えてプリンス・オブ・ジ・アースへ

チャールズ皇太子の服装術

「買うなら一度だけ、良いものを買え」をモットーに、高品質のものを末く使い続けるチャールズ皇太子。
いま改めて注目を集めるチャールズ皇太子の服装術を、服飾史家の中野香織さんが決ぎる。

Words 中野香織 Kaori Nakano / Photos 小嶋淳介 Shunsuke Kojima(still life)

右を向いても左を向いても、サステイナビリティの大合唱である。

サステイナビリティがこのような絶対正義になるずっと前から、むしろ変人扱いすらされるマイノリティとして、必要性を唱え続け、実践していたプリンスがいる。

イギリスのチャールズ皇太子である。年間約6億円の1桁6年間からブラスチック問題を語り、バブル全盛期だった1980年代に有機農業を始め、1987年に作ったアンダーソン&シェパードのツイードコートを30年以上経った今も着続ける、つぎはぎがほどこされたジョッパロブの靴はあまりにも有名だし、かけはぎのあるグレーのスーツが話題されたこともある。モットーは「買うなら一度だけ、良いものを買え（Buy Once, Buy Well）」。満足独いた良いものをいったん買ったならば、ケアをして長くつかう。

プリンス・オブ・サステイナビリティの称号は伊達ではない。

コートは上記のツイードとキャメルを着回し、自分のスタイルを「ぶとった時計」と称するチャールズ皇太子は、サステナブル全盛の今、焼きしまと脱力感を同居させるスタイルアイコンとしての存在感を増しているが、実は最新のファッションセンスの持ち主でもある。

変わらぬダブルのスーツを着続けながらも、ポケットチーフ、ネクタイ、そしてブトニエールのアレンジによって、抑制と乗が同居する神士の神を長く続けている。神に近い中間色を選ぶことで、落ち着きと活気を同時に感じさせる。カントリーでは伝統の重みと実用の軽やかさを兼ね備えた古典的なスポーツスタイルで統一する。生高原はなりすぎない、風通しの良い雰囲気もあいまって、神士の装いの現代的な基準を示し続けている、いわばジェントルマンスタイルの頂点である。

母母のマーガレット王女のようにファッショナブルなサークルには属なっていないけれど、ファッションに関心の高い人々の意識においては、実に皇太子は最先神にいる。イギリス版VOGUEの編集長、エドワード・エニンフルもチャールズ皇太子の動きには注目し、昨年11月には皇太子のサステイナブルファッションに関する表紙についてのビデオインタビューを行っている。

とはいえ、チャールズ皇太子は、大伯父スドワード8世（ウィンザー公）のようなスタイルのカリスマとしても名を残すつもりは毛頭ないだろう。むしろ、ファッション業界を保護し、支援することに、皇太子は大きな力を注いでいる。

トラディショナル・エデュケーショナル

2010年からは「キャンペーン・フォー・ウール」を皇太子がおらがち先頭に、スコットランドのエスケート・ツイードの工場を復活させることに尽力した。

この活動は今なお続いており、2020年12月には、「キャンペーン・フォー・ウール」の10周年を祝い、皇太子は、環境に配慮したスカーフを発表した。スコットランドの生地メーカー、「ジョンストンズ オブ エルガン」で制作されたもので、イギリス、オーストラリア、南アフリカ、ニュージーランドの4カ国のウールが原料として使用されている。デザイナーは、サステイナブルとエシカルを標ごとするラグジュアリーブランド「マザーオブパール」のエイミー・パウニーである。売り上げは、ウール産業の人材育成と、皇太子が支援する機織産業の教育プログラム「フューチャーテキスタイル」に寄付される。

つまり、皇太子は自らの地位を最大限に活かして国内産業の保護に責任を持ち続け、伝統を継承していくための教育にも投資しているわけである。エコ・エシカル・サステナビリティに早くから注目していたばかりではなく、それを一貫して追求し続け、リスポンシブル・トラディショナル・エデュケーショナル（責任を果たし、伝統を守り、教育に力を入れる）という社会貢献を先決的に行っている実績が、皇太子を現地系産業界として別格な存在にしている。

守るのはウール産業だけではない。クラフトの技術、テーラリングや縫製の技術の伝承にも皇太子は注力している。2020年11月には、ラグジュアリーECサイトのユークス・ネッタポルテ・グループと組んでサステイナブルな18のカプセルコレクションを発表した。チャールズ皇太子がパトロンとして支援する教育関連のチャリティ団体「ザ・プリンス ファンデーション」とと記のECサイトがコラボし、現代職人のためのプロジェクトとしてをんしコレクションである。イタリアのミラノ工科大学出身の職人がデザインを手がけ、イギリスの職人が技術をサポートし、スコットランドのテキスタイル・トレーニングセンターが、手作業で仕上げた。

バンデミックのさなかでも国境を越えたコラボが成功したのは、インターネットによるコミュニケーションを駆使できたためばかりではない。ECサイトのCEO、フェデリコ・マルケッチとチャールズ皇太子の熱意が一致していたことが大きいだろう。

ザ・プリンス ファンデーションの教育ディレクターは、次のようなコメントをしている。「プロジェクトに関わる学生は、職人として皇太子と特別な絆を築くことができた」。この絆の実感は、次世代の職人の大きなモチベーションとなるはずだ。

こうした長年にわたる実績があればこそ、チャールズ皇太子が2021年1月11日にパリの「ワン・プラネット・サミット」で開催したテラ・カルタ（地球憲章）が説得力をもつ。持続可能な未来に向かって具体していくため、自然資本への投資を優やしていくことを国記全体に対して呼びかける憲章である。皇太子が1年前のダボス会議で公ちょ上げた「持続可能な市場のためのイニシアティブ」と連動するもので、2030年までに企業が向かうべきロードマップを示す。約800年前に制定されたマグナ・カルタ（自由の大憲章）が人々の自由と権利を求めるものであったとみなすならば、今年、提唱されたテラ・カルタは、いわば「地球（自然）の自由」を求めるもの、と位置付けられようか。

マグナ・カルタは今なおイギリスの法律の基本をなしている。テラ・カルタは、800年先の地球と人類の未来を見据えている。伝立をもってそれを唱えるチャールズ皇太子は、今や一国の皇太子を超えて、プリンス・オブ・ジ・アースと呼ばたくなるような貫禄をたたえる。

←
イギリス版「VOGUE」2020年12月号に掲載された、チャールズ皇太子が1980年代後半にビスポークしたニューエルロックウッドのショーズ。現在はジョンロブ氏がメンテナンスしている。

Kaori Nakano　中野香織
服飾史家。昭和女子大学名誉教授。ラグジュアリー業種に関する研究・執筆・講演を行うほか、企業のアドバイザーを務める。著書に『イノベーター』（平凡社）、『ロイヤルスタイル 英国王室ファッション史』（角川ミ文庫）、『神々の名前』（小学館）、『ダンディズムの系譜 男が惹れた男たち』（新潮社）、『モードとエロスと思考』（集英社）など。
http://www.kaori-nakano.com

Getty Images